

令和 7 年度全国学力・学習状況調査に係る 結果の概要と指導のポイント

登別市教育委員会

【Ⅰ 調査の概要】

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査実施日

- (1) 令和 7 年 4 月 17 日（木）【国語科、算数科、数学科、小学理科】
- (2) 令和 7 年 4 月 18 日（金）～ 4 月 30 日（水）のうち 1 日【児童質問調査】
- (3) 令和 7 年 4 月 14 日（月）～ 4 月 17 日（木）のうち 1 日【中学理科、生徒質問調査】

3 調査対象

小学校第 6 学年（280 名参加）、中学校第 3 学年（243 名参加）

4 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語科、算数科・数学科、理科）
- (2) 生活習慣や学習環境等に関する質問調査（児童生徒に対する調査・学校に対する調査）

5 中学理科のテストについて

- (1) 中学理科は、オンライン方式で実施した。
- (2) 問題は、生徒 1 人当たり公開問題 10 問と非公開問題 16 問の計 26 問で構成されている。

※公開問題（全日程に共通する問題 6 問・実施日別の問題 4 問）

※非公開問題（幅広い内容や異なる難易度で構成され、生徒ごとに異なる問題が出題）

- (3) I R T（P 4 ※参照）を用いた結果が返却された。

6 その他

- (1) 本調査は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面である。
- (2) 教育上の影響を踏まえ、学校別の結果は公表しない。

【Ⅱ 本市における調査結果の概要】

※中学理科以外は、本市と全国の平均正答率による比較

※中学理科は、本市と全国の I R T バンドの割合による比較

～－2.1	－2.0～－1.1	－1.0～＋1.0	＋1.1～＋2.0	＋2.1～
▲下回る	△やや下回る	＝同等	○やや上回る	◎上回る

1 学力調査

【小学校】

○国語科、算数科、理科の全教科で全国の平均正答率を下回っており、特に算数科では全国との差が大きい。

【中学校】

- 国語科と数学科が全国の平均正答率と同等であり、理科が上回っている。
- 国語科では、本調査対象生徒が小学6年生の時（令和4年度）、全国の平均正答率を上回っていたが、令和7年度は全国平均と同等である。
- 数学科では、小学6年生の時（令和4年度）、全国の平均正答率をやや下回っていたが、令和7年度は全国平均と同等である。
- 理科では、小学6年生の時（令和4年度）、全国の平均正答率を上回っており、令和7年度は I R T スコアが 10 ポイント全国平均を上回っている。

2 質問調査

【確かな学力】

○本報告書に掲載している質問に対して肯定的に回答している割合が全国平均を上回っていることから、意欲的に学習している様子がうかがえる。また、学校でタブレット端末を積極的に活用している様子がうかがえる。一方、学力調査の結果が全国平均正答率を下回っている教科があることから、自身の思考や行動を客観的に認識（メタ認知）する力を高めることが大切である。

【豊かな人間性】

○「人が困っている時、進んで助ける」「いじめは絶対に許されない」「地域や社会を良くするために行動したい」という質問に対し、肯定的に回答している児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、他者やふるさと登別を大切にしている様子がうかがえる。一方、「困ったとき、学校の大人に相談できる」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を下回っていることから、「S O S の出し方に関する教育」を継続することが大切である。

【健康・体力の向上】

○生徒には、規則正しい生活習慣がある程度身に付いている様子がうかがえる。一方、児童にはあまり身に付いていない様子がうかがえることから、生活リズムの乱れが心身に与える影響について、保健の授業での重点的指導や資料等を活用した継続的な啓発が大切である。

【Ⅲ-1 本市における調査結果表（令和7年度）】

1 平均正答率（％）の比較表【登別市、全道、全国】

（1） 小学校第6学年

国 語	登 別 市	北 海 道 （本市と全道との比較）	全 国 （本市と全国との比較）
合計得点	64.0	65.0（－1.0）	66.8（－2.8）
言語等	71.4	73.0（－1.6）	74.5（－3.1）
話すこと・聞くこと	61.7	65.0（－3.3）	66.3（－4.6）
書くこと	69.9	68.3（＋1.6）	69.5（＋0.4）
読むこと	52.8	56.1（－3.3）	57.5（－4.7）
評価の観点（知識・技能）	71.4	73.0（－1.6）	74.5（－3.1）
評価の観点（思・判・表）	60.6	62.4（－1.8）	63.8（－3.2）

算 数	登 別 市	北 海 道 （本市と全道との比較）	全 国 （本市と全国との比較）
合計得点	51.0	55.0（－4.0）	58.0（－7.0）
数と計算	53.1	58.6（－5.5）	62.3（－9.2）
図形	52.7	53.9（－1.2）	56.2（－3.5）
測定	48.7	50.7（－2.0）	54.8（－6.1）
変化と関係	54.0	55.4（－1.4）	57.5（－3.5）
データの活用	56.4	60.9（－4.5）	62.6（－6.2）
評価の観点（知識・技能）	57.9	62.6（－4.7）	65.5（－7.6）
評価の観点（思・判・表）	42.4	45.5（－3.1）	48.3（－5.9）

理 科	登 別 市	北 海 道 （本市と全道との比較）	全 国 （本市と全国との比較）
合計得点	53.0	56.0（－3.0）	57.1（－4.1）
エネルギー	44.0	44.8（－0.8）	46.7（－2.7）
粒子	47.6	50.7（－3.1）	51.4（－3.8）
生命	49.3	51.9（－2.6）	52.0（－2.7）
地球	61.6	65.9（－4.3）	66.7（－5.1）
評価の観点（知識・技能）	52.2	54.2（－2.0）	55.3（－3.1）
評価の観点（思・判・表）	54.6	58.2（－3.6）	58.7（－4.1）

(2) 中学校第3学年

国 語	登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
合計得点	55.0	54.0 (+1.0)	54.3 (+0.7)
言語等	53.3	48.8 (+4.5)	48.1 (+5.2)
話すこと・聞くこと	54.0	53.8 (+0.2)	53.2 (+0.8)
書くこと	52.9	51.4 (+1.5)	52.8 (+0.1)
読むこと	62.1	62.0 (+0.1)	62.3 (-0.2)
評価の観点(知識・技能)	53.3	48.8 (+4.5)	48.1 (+5.2)
評価の観点(思・判・表)	55.6	54.8 (+0.8)	55.3 (+0.3)

数 学	登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
合計得点	49.0	47.0 (+2.0)	48.3 (+0.7)
数と式	46.5	43.4 (+3.1)	43.5 (+3.0)
図形	47.3	44.9 (+2.4)	46.5 (+0.8)
関数	48.5	46.6 (+1.9)	48.2 (+0.3)
データの活用	53.5	54.8 (-1.3)	58.6 (-5.1)
評価の観点(知識・技能)	57.1	53.6 (+3.5)	54.4 (+2.7)
評価の観点(思・判・表)	35.7	36.4 (-0.7)	39.1 (-3.4)

理 科	登別市	北海道 (本市と全道との比較)	全国 (本市と全国との比較)
平均 I R T スコア	513	505	503
I R T バンド【I R T スコア範囲】			
5【651～】	5.3	6.6 (-1.3)	6.2 (-0.9)
4【551～650】	27.2	19.9 (+7.3)	20.3 (+6.9)
3【451～550】	37.9	42.1 (-4.2)	42.0 (-4.1)
2【351～450】	24.7	27.6 (-2.9)	27.3 (-2.6)
1【～350】	4.9	3.9 (+1.0)	4.2 (+0.7)

【I R T について】

※国際的な学力調査や英語資格・検定試験で作用されているテスト理論である。

※受験者の解答パターンや問題の難易度から、一人一人の能力測定する理論である。

※I R T スコアとは、500を基準にした得点(推定学力)である。難易度が高い問題に正答していると高めに、難易度が低い問題に誤答していると低めに算出される特徴がある。

※I R T バンドとは、I R T スコアを5段階に区切ったもので3が基準で5が最も高い。

(3) 普段の授業についての肯定的な回答率(%) 「児童生徒質問調査」より

国語	小学校		中学校	
	登別市	全国 (本市と全国との比較)	登別市	全国 (本市と全国との比較)
好き	58.6	58.3 (+0.3)	60.7	57.9 (+2.8)
得意	55.7	61.4 (-5.7)	63.8	51.4 (+12.4)
授業がよくわかる	81.8	82.8 (-1.0)	84	77.0 (+7.0)

算数・数学	小学校		中学校	
	登別市	全国 (本市と全国との比較)	登別市	全国 (本市と全国との比較)
好き	55.7	57.9 (-2.2)	42.3	54.1 (-11.8)
得意	55.0	60.3 (-5.3)	33.7	46.0 (-12.3)
授業がよくわかる	81.1	78.3 (+2.8)	68.7	70.3 (-1.6)

理科	小学校		中学校	
	登別市	全国 (本市と全国との比較)	登別市	全国 (本市と全国との比較)
好き	90.0	80.1 (+9.9)	67.5	63.8 (+3.7)
得意	86.5	78.4 (+8.1)	42.8	50.7 (-7.9)
授業がよくわかる	96.5	88.9 (+7.6)	67.5	71.4 (-3.9)

【Ⅲ-2 調査結果グラフ】※中学校理科を除く

※問題の難易度や出題内容は毎年異なるため、過年度の平均正答率と比較することは適当ではない。ここでは、各年度の本市と全国の差の状況について記述する。

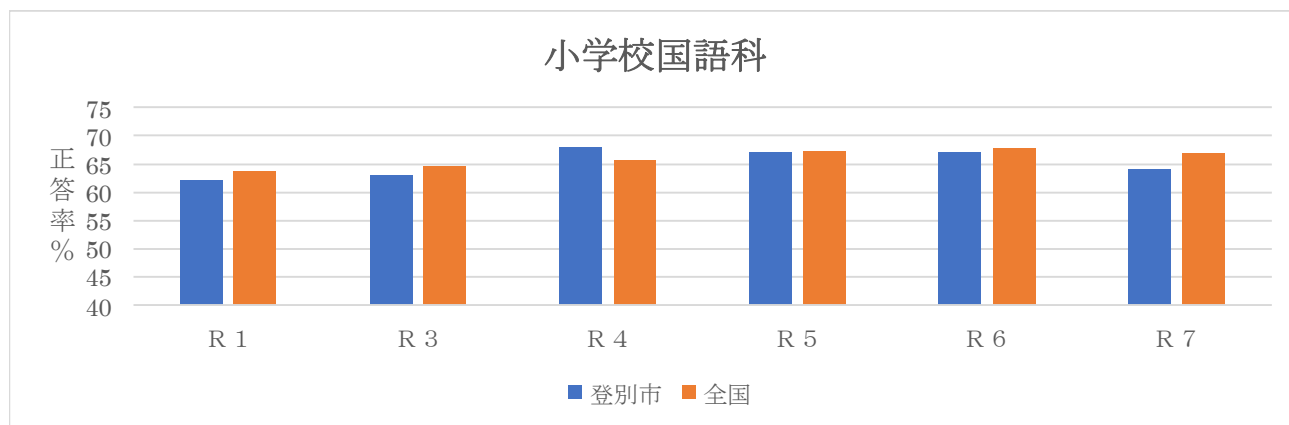
※中学校理科について、令和7年度から出題形式や結果の提供方法が変更されたことに伴い、令和4年度の結果との比較はできないため、グラフは省略する。

※令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により調査は未実施である。

1 合計得点（平均正答率）の各年度比較グラフ（登別市・全国）（令和元年～）

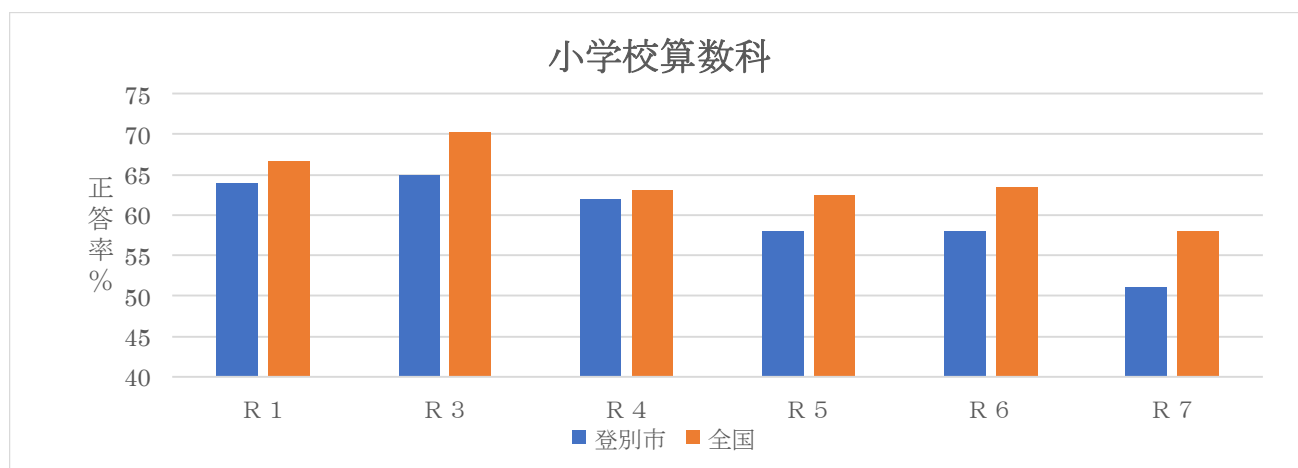
（1）小学校国語

令和元年度と令和3年度は全国の平均正答率をやや下回り、令和4年度は全国を上回り、令和5年度と令和6年度は全国と同等であり、令和7年度は全国を下回っている。



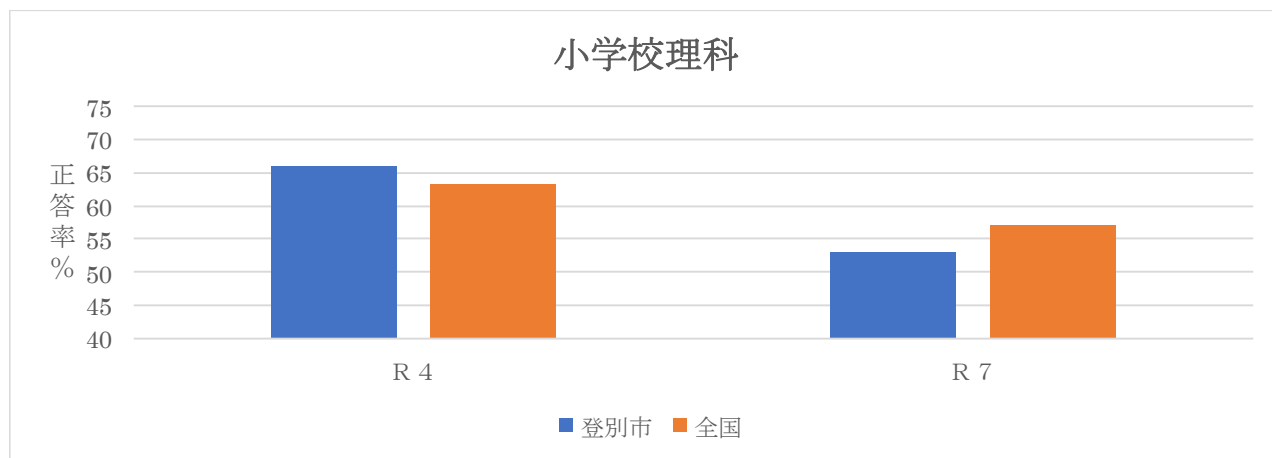
（2）小学校算数

令和元年度と令和3年度は全国の平均正答率を下回り、令和4年度は全国をやや下回り、令和5年度以降は全国を下回っており、全国平均との差が徐々に開きつつある。



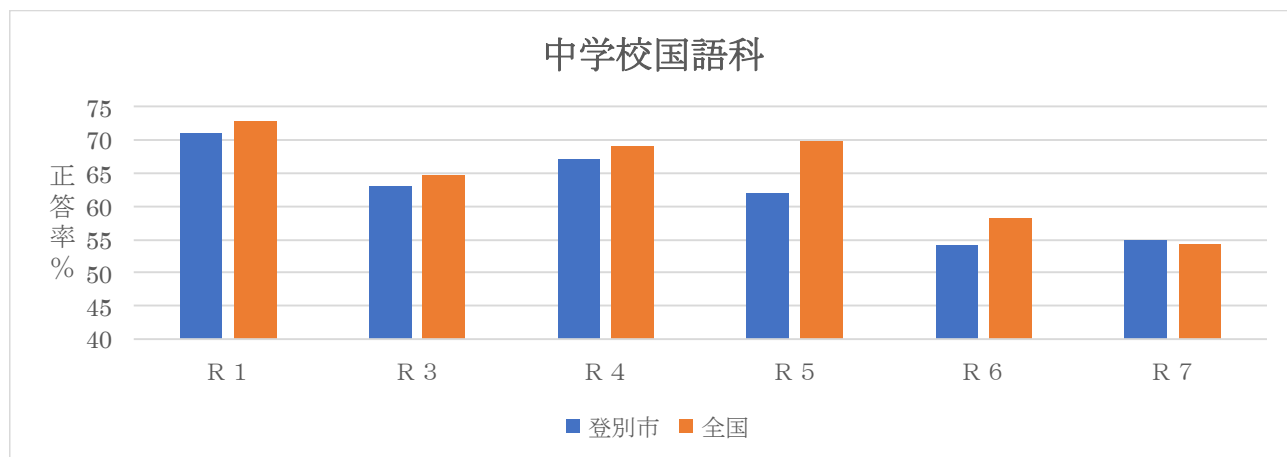
(3) 小学校理科

令和4年度は全国の平均正答率を上回ったが、令和7年度は全国を下回っている。



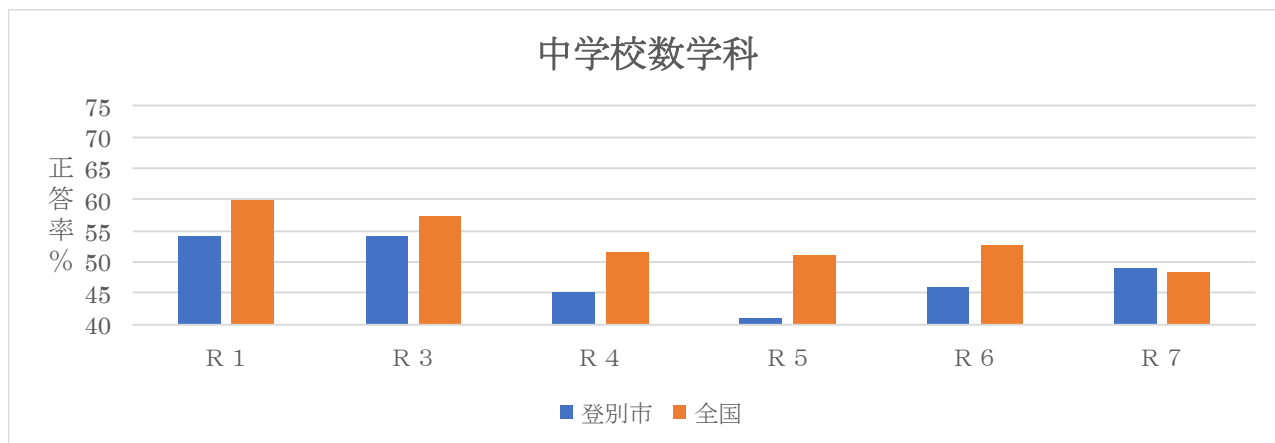
(4) 中学校国語

令和元年度と令和3年度は全国の平均正答率をやや下回り、令和4年度から令和6年度までは全国を下回り、令和7年度は全国と同等である。



(5) 中学校数学

令和元年度以降全国の平均正答率を下回っていたが、令和7年度は全国と同等である。



【Ⅲ-3 各教科の結果と分析】

※以下記述の記号や比較表現は、P 2 参照

1 小学校国語科

(1) 結果

ア 言語等 (▲)

全国の平均正答率を下回っているが、「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと」は、全国と同等である。

イ 話すこと・聞くこと (▲)

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

ウ 書くこと (=)

全国の平均平均正答率と同等であるが、「図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」は全国をやや上回り、「目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」は全国を上回っている。

エ 読むこと (▲)

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

(2) 分析

- 「書くこと」の平均正答率が全国平均と同等であることから、全国と同等程度に目的や意図に応じて、事実と感想、意見を区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書く指導をしていることがうかがえる。
- 「言語等」「話すこと・聞くこと」「読むこと」の平均正答率が全国平均を下回っていることから、様々な内容をバランスよく身に付けさせる指導が不足していることがうかがえる。
- 評価の観点である「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」の平均正答率に差があることから、「知識・技能」を活用して「思考力・判断力・表現力」を育成する指導が不足していることがうかがえる。
- 児童質問調査で、国語が「好き」と回答した児童の割合が全国平均と同等であるが、「得意」と回答した児童が全国平均を下回っていることから、国語に対する苦手意識をもっていることがうかがえる。

2 小学校算数科

(1) 結果

ア 数と計算 (▲)

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

イ 図形 (▲)

全国の平均正答率を下回っているが、「台形の意味や性質について理解すること」は全国をやや上回っている。

ウ 測定（▲）

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

エ 変化と関係（▲）

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

オ データの活用（▲）

どの問題においても、全国の平均正答率を下回っている。

（２）分析

○全領域（「数と計算」「図形」「測定」「変化と関係」「データの活用」）及び評価の観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」）について、全国の平均正答率を下回っていることから、計算問題や文章題を解く回数が少ないなど、学習内容を定着させる指導が不足していることがうかがえる。

○評価の観点「思考力・判断力・表現力」の平均正答率が低いことから、問題文から問題を解くために必要な情報を読み取らせる指導が不足していることがうかがえる。

○児童質問調査で、算数が「好き」及び「得意」と回答した児童が全国平均を下回っていることから、算数に対する興味関心が低く、苦手意識をもっていることがうかがえる。

3 小学校理科

（１）結果

ア エネルギー（▲）

全国の平均正答率を下回っているが、「電磁石の強さは電流の大きさや巻数によって変わることについて理解すること」は全国と同等である。

イ 粒子（▲）

全国の平均正答率を下回っているが、「水の蒸発について概念的に理解すること」は全国と同等である。

ウ 生命（▲）

全国の平均正答率を下回っているが、「植物の発芽や成長についての理解や表現」は全国と同等である。

エ 地球（▲）

全国の平均正答率を下回っているが、「水の蒸発について概念的に理解すること」は全国と同等である。

（２）分析

○全領域（「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」）及び評価の観点（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」）について、全国の平均正答率を下回っていることから、学習内容を定着させるための指導が不足していることがうかがえる。

○児童質問調査で、理科が「好き」「得意」「授業がよく分かる」と回答した児童が全国平均を上回っている。一方、学力調査の平均正答率は全国を下回っていることから、授業で「観察や実験等の活動を楽しんでいるが、そこから科学的な知識や概念

等の定着が図られていない」「児童が主体的に考える機会が少ない」ことがうかがえる。また、児童が自身の思考や行動を客観的に認識（メタ認知）していないことがうかがえる。

4 中学校国語科

（１）結果

ア 言語等（◎）

全国の平均正答率を上回っている。

イ 話すこと・聞くこと（＝）

全国の平均正答率と同等であるが、「相手の反応を踏まえながら、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫すること」は全国を上回っている。

ウ 書くこと（＝）

全国の平均正答率と同等であるが、「目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること」は、全国を上回っている。

エ 読むこと（＝）

全国の平均正答率と同等であるが、「文章全体と部分の関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えること」は、全国を上回っている。

（２）分析

○評価の観点である「知識・技能」は全国の平均正答率を上回り、「思考力・判断力・表現力」は全国の平均正答率と同等であること、また、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」がバランスよく定着していることから、身に付けさせたい資質能力を明確にした指導が行われていることがうかがえる。

○生徒質問調査で、国語が「好き」「得意」と回答した生徒の割合が全国平均を上回っているから、国語に対する肯定的な意識をもっていることがうかがえる。

5 中学校数学科

（１）結果

ア 数と式（◎）

全国の平均正答率を上回っている。

イ 図形（＝）

全国の平均正答率と同等であるが、「多角形の外角の意味を理解すること」は全国を上回り、「証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすこと」は全国をやや上回っている。

ウ 関数（＝）

全国の平均正答率と同等であるが、「グラフから必要な情報を読み取ること」は全国を上回り、「一次関数の計算」は全国をやや上回っている。

エ データの活用（▲）

全国の平均正答率を下回っているが、「必ず起こる事柄の確率について理解する

こと」は全国と同等である。

(2) 分析

- 評価の観点である「知識・技能」は全国の平均正答率を上回っており、「思考力・判断力・表現力」は全国の平均正答率を下回っていることから、「知識・技能」を活用して「思考力・判断力・表現力」を育成する指導が不足していることがうかがえる。
- 計算問題より文章問題の平均正答率が低いことから、問題文から問題を解くために必要な情報を読み取る指導が不足していることがうかがえる。
- 「データの活用」は全国の平均正答率を下回っていることから、この分野の指導が不足していることがうかがえる。
- 生徒質問調査で、数学が「好き」「得意」と回答した生徒の割合が全国平均を下回っていることから、数学に対する興味関心が低く、苦手意識をもっていることがうかがえる。

6 中学校理科

(1) 平均 I R T スコア

全国平均を上回っている。

(2) I R T バンド

- ・ I R T バンド 5 の生徒の割合は、全国と同等である。
- ・ I R T バンド 4 の生徒の割合は、全国を上回っている。
- ・ I R T バンド 3 の生徒の割合は、全国を下回っている。
- ・ I R T バンド 2 の生徒の割合は、全国を下回っている。
- ・ I R T バンド 1 の生徒の割合は、全国と同等である。

(3) 分析

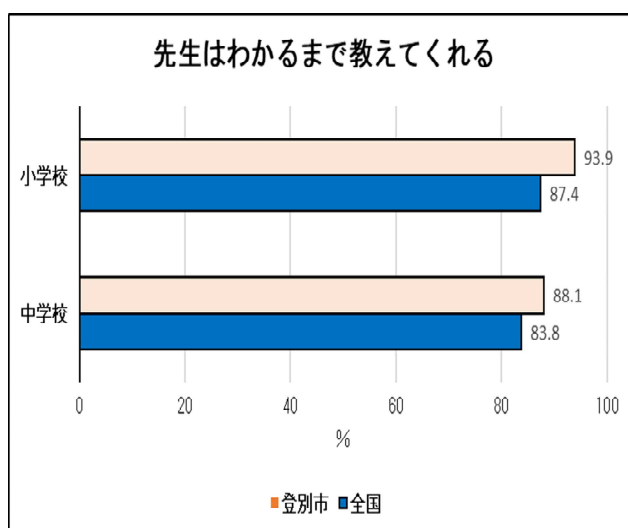
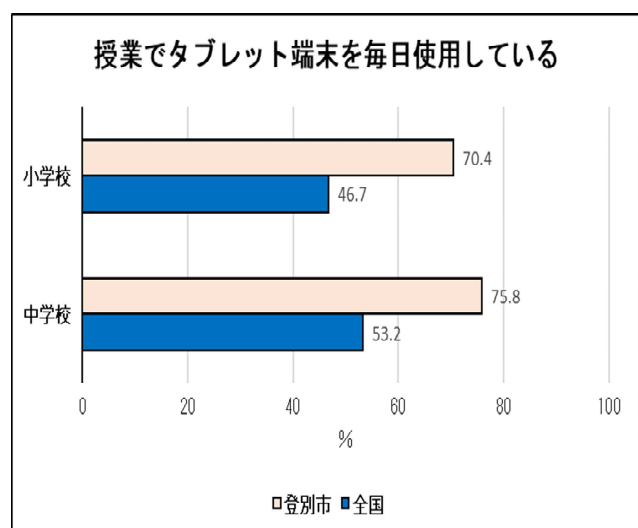
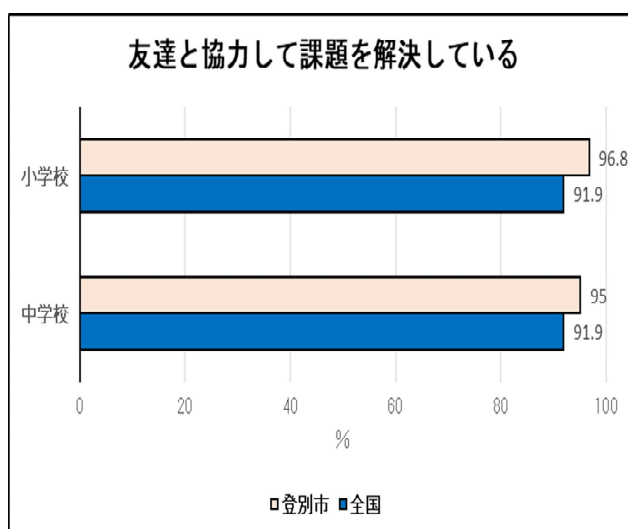
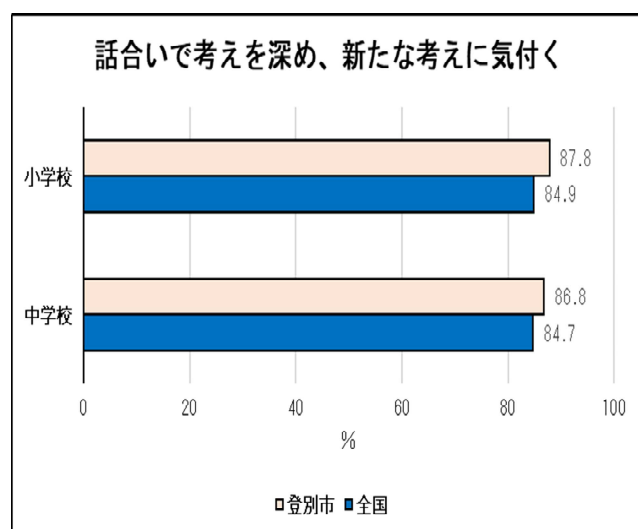
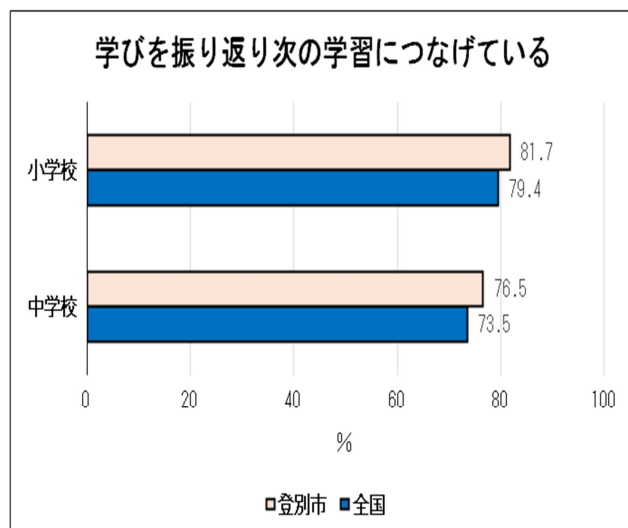
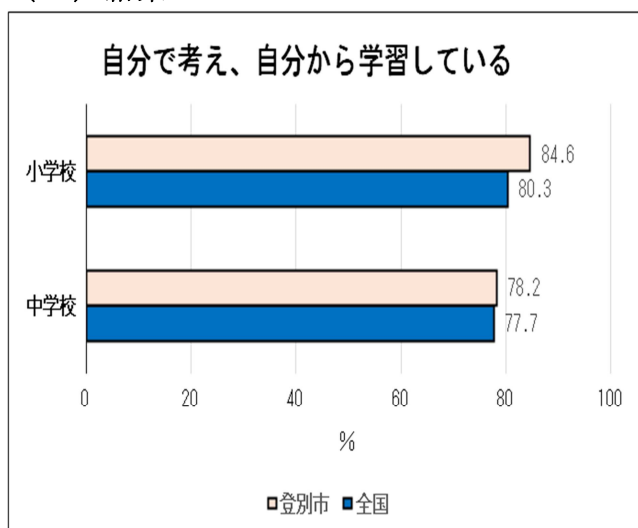
- 平均 I R T スコアが全国平均を上回っていることや I R T バンド 2・3 の割合が低く 4 の割合が高く、5 の割合が同等であることから、身に付けさせたい資質能力を明確にした指導が行われていることがうかがえる。
- I R T バンド 1 の生徒が一定程度いることから、一人一人の理解度に応じた指導が不足していることがうかがえる。
- 生徒質問調査で、理科が「好き」と回答した生徒の割合が全国平均を上回っているが、「得意」と回答した生徒の割合が全国平均を下回っていることから、理科に対する自信がもてないことがうかがえる。

【Ⅲ-4 児童生徒質問紙調査結果の概要と分析】

令和7年度教育行政執行方針に関する項目を抽出しています。

1 確かな学力について

(1) 結果

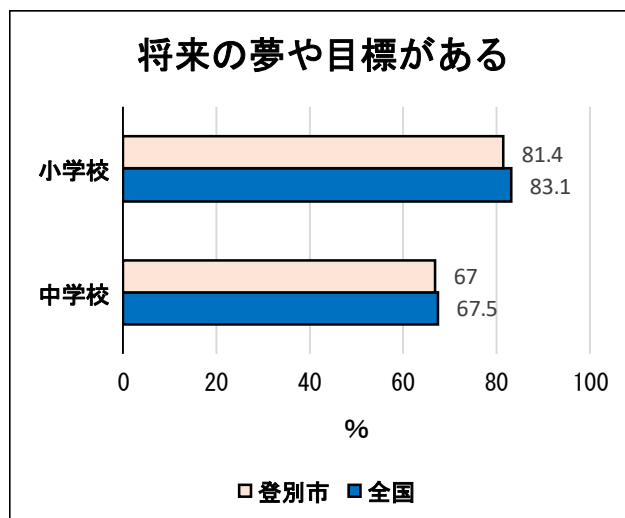
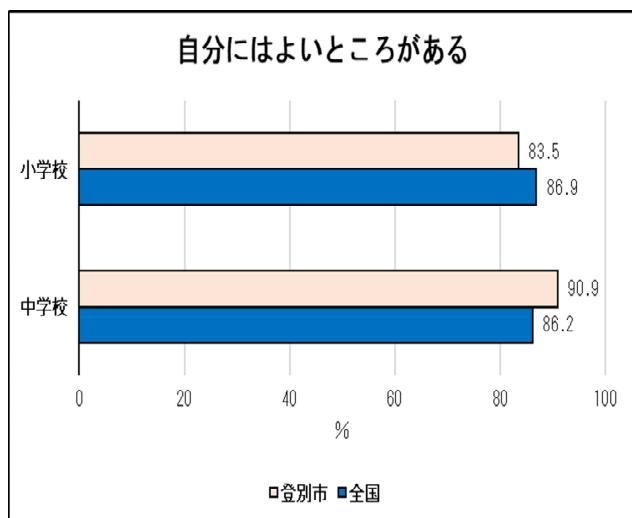


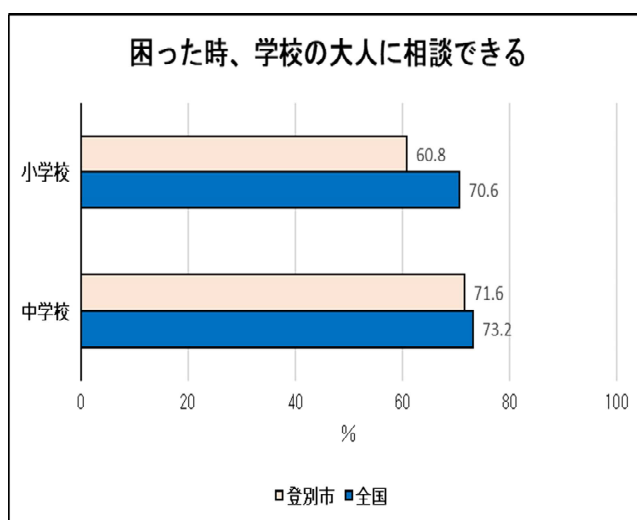
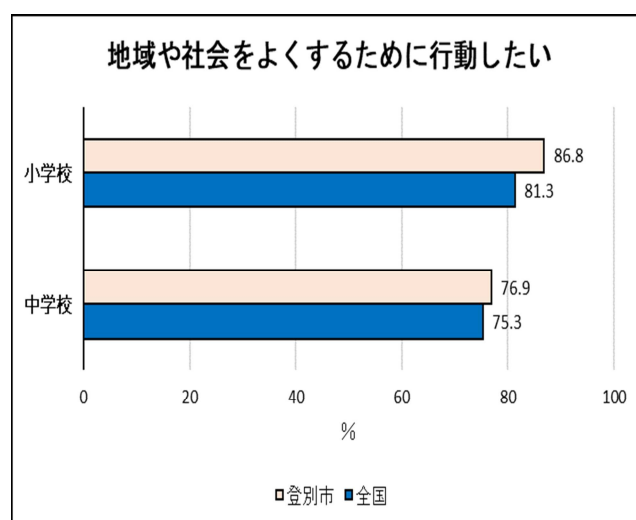
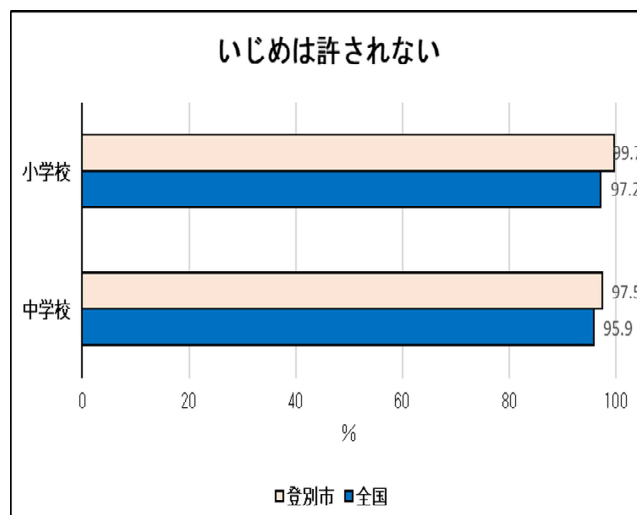
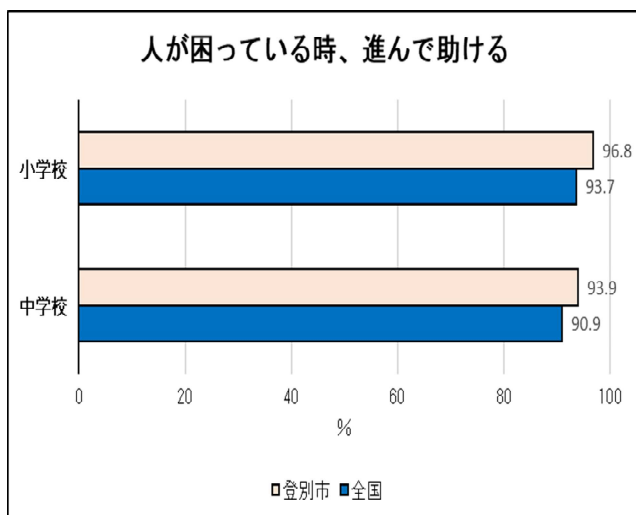
（２）分析

- 「自分で考え、自分から学習している」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均より高く、生徒の割合が全国平均と同等であることから、児童生徒が主体的に学習していることがうかがえる。
- 「学びを振り返り次の学習につなげている」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、児童生徒が授業の目標や課題を意識し、自らの学びについて振り返る学習をしていることがうかがえる。
- 「話し合いで考えを深め、新たな考えに気付く」、「友だちと協力して課題を解決している」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、児童生徒がグループ学習などで協働的に学んでいることがうかがえる。
- 「授業でタブレット端末を毎日使用している」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を大きく上回っていることから、児童生徒が授業でタブレット端末を積極的に活用していることがうかがえる。
- 「先生はわかるまで教えてくれる」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、教員が児童生徒の理解力を高めるように指導をしていることがうかがえる。

2 豊かな人間性について

（１）結果





(2) 分析

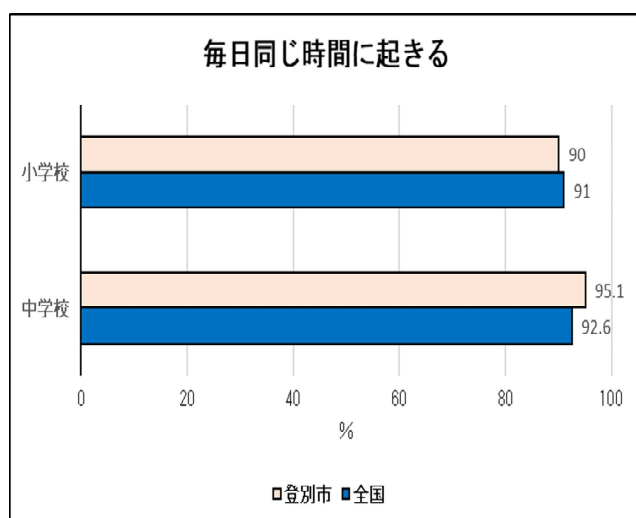
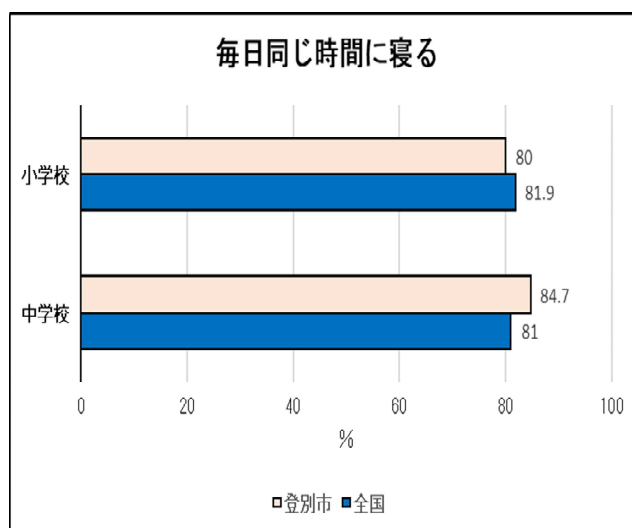
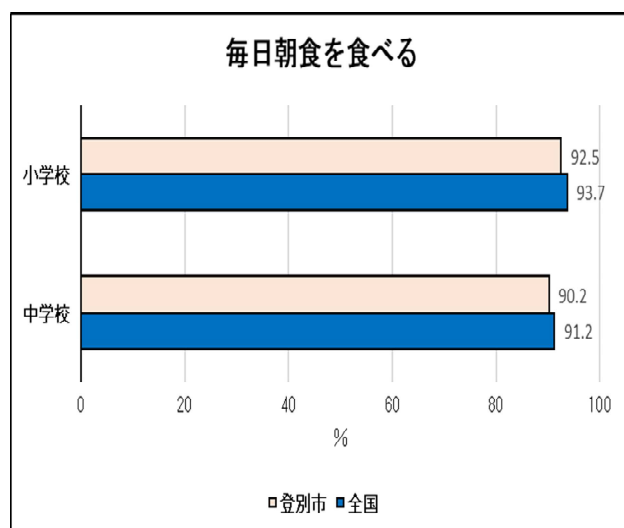
- 「自分にはよいところがある」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均を下回り、生徒の割合が全国平均を上回っていることから、児童の自己肯定感が低く、生徒の自己肯定感が高いことがうかがえる。「結果よりも取り組んだ過程の努力や挑戦したことについて、褒め・認める」「他者との比較ではなく、自己の成長に目を向ける働きかけをする」など、プラス思考につながる関わりをすることが大切である。また、児童が興味を広げ得意なことを見つける取組やそれを発表する機会を設けることなども有効である。
- 「将来の夢や希望がある」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均をやや下回り、生徒の割合が全国平均と同等であることから、小学校から、なりたい自分の姿や自己目標の実現を意識した教育活動を進めることが大切である。
- 「人が困っている時、進んで助ける」「いじめは許されない」という質問に対し、肯定的に回答した児童生徒の割合が全国平均を上回っていることから、規範意識や他者を大切にする意識の高さがうかがえる。「みんなが通いたくなる学校づくり」に向けて「鬼っ子フォーラム」の継続実施や各学校のいじめ防止に向けた取組の更なる

浸透を図り、互いの違いを認め合い尊重し合う豊かな心の育成や規範意識の維持・向上を図っていくことが大切である。

- 「地域や社会を良くするために行動したい」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均を上回り、生徒の割合が全国平均をやや上回っている。一方で、小学生と中学生の差は全国よりも大きい。そのため、「ふるさと登別」に愛着や誇りを持ち続けることができるように、引き続き本市の産業や文化への理解を深め、家庭や地域の人たちと連携したキャリア教育を推進することが大切である。
- 「困った時、学校の大人に相談できる」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合は下回り、生徒はやや下回っている。教職員と生徒の信頼関係が学校教育の土台であるため、日ごろから児童生徒がいつでも相談できる関係を構築することが大切である。また、「S O S の出し方に関する教育」を継続することで、先生やスクールカウンセラーにいつでも相談してもよいという意識を高める必要がある。

3 健康・体力の向上

(1) 結果



(2) 分析

○「朝食を毎日食べる」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均をやや下回り、生徒の割合が全国平均と同等である。「同じ時間に寝る」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合がやや下回り、生徒の割合が上回っている。

「同じ時間に起きる」という質問に対し、肯定的に回答した児童の割合が全国平均と同等であり、生徒の割合が全国平均を上回っている。このことから、児童に基本的な生活習慣があまり身に付いていないが、生徒にはある程度身に付いていることがうかがえる。保健の授業で、生活リズムを整える大切さについて重点的な指導をするとともに、折に触れて生活リズムが乱れた際の身体や脳への影響等について指導することが大切である。また、学校だよりでの定期的な呼び掛けや保護者懇談会での情報提供等を繰り返し、保護者への啓発を続けることも有効である。

【Ⅴ 調査結果と分析を踏まえた学校における学習指導のポイント】

1 どの教科にも共通する指導のポイント

- (1) 学習内容の確実な定着に向けて、各学校で実施している「ほっかいどうチャレンジテスト」や「標準学力検査」等の結果を改めて分析し、どこ（学年・単元）でつまづいているのかを把握し、できるようになるまで復習をする。
- (2) 学習内容の確実な定着に向けて、学習指導要領の目標や内容と単元の目標の整合性を図り、「何ができるようになるのか」（育成を目指す資質・能力）を重視した指導計画を立てる。
- (3) 学習内容の確実な定着に向けて、授業支援ソフト等の活用により児童生徒一人一人の学習状況を的確に把握し、できるようになるまで支援する。また、学習内容が定着するようA Iドリルを活用し復習する機会を計画的に位置付ける。
- (4) 自己調整する力を育むため、学習課題を解決するまでの見通しをもたせ、粘り強く解決させる授業を行う。また、自らの学び方の振り返りを位置付けた授業をする。
- (5) 思考力や判断力、表現力等を養うため、「なぜ、そのように考えたのか」等の自分の考えを説明したり、文章にまとめたりする活動が頻繁に行われる授業をする。

2 教科別の指導のポイント

(1) 国語科

- 苦手意識を克服するため、「普段から本に親しむ機会を設け、読書する習慣が自然と身に付くような取組をする」「日常生活や授業での対話を大切にする」など、文字や言葉に触れる機会を十分に確保するとともに、授業では「個別指導による学力定着への取組の徹底」や「できたことを褒め認め、児童が自らの成長を実感する支援」等が大切である。
- どの学習内容もバランスよく定着させるため、国語科で身に付けさせたい資質能力を明確にし、「話す」「聞く」「読む」「書く」活動を計画的に指導計画に位置付けることが大切である。

(2) 算数・数学科

- 授業支援ソフト等の活用により、児童生徒一人一人の学習状況を的確に把握し、できるようになるまで指導を徹底する。特に、平均正答率が低い層の児童生徒が確実に理解する授業をする。その際、個々の理解度に応じて学びを深めることができるA Iドリルを繰り返し利用することが大切である。
- 題意を正しく捉えるため、問題文から問題を解くために必要な情報を選び、解決までの見通しもち、順を追って考えを積み重ねていく思考過程を大切にした授業を徹底する必要がある。具体的には、問題の内容について、教員による口頭での説明や確認だけではなく、児童生徒が図や表に表し、数量の関係を捉え、式に表す授業を展開する。
- 苦手意識を克服するため、「小テストや個別課題によるスモールステップ学習により、成功体験を積み重ねる取組」「できたことを具体的に褒め認め、児童が自らの成

長を実感する支援」等が大切である。

- データの活用力を高めるため、目的に応じて、データを収集・整理して、それを基に分布の傾向を読み取り、批判的に考察し判断するとともに、判断した事柄について根拠を明らかにして説明する授業をすることが大切である。

(3) 理科

- 苦手意識を克服するため、できるようになったことを認識させ、自分の成長を実感できるような働きかけをするとともに、今年度導入したA Iドリルを効果的に活用し、児童生徒一人一人の理解度に応じた学習を一層推進することが大切である。
- 問題の解決方法を考えさせる際、自分の予想や仮説だけでなく、他者の予想や仮説についても把握させる授業が大切である。これは、自分と他者の考えを共有や比較が容易にできるタブレット端末の共同編集アプリを活用すると効果的である。